

中学校美術科教育の主題と領域の一考察

－アジアにおけるグローバル化と独自文化の形成－

福田 隆真*¹

On the Relations of Subjects and Fields in Junior High School Art Education:
globalization and development of unique culture in Asia

FUKUDA Takamasa*¹

(Received August 3, 2023)

キーワード：美術教育、アジア、グローバル化、主題、領域

はじめに

本稿は中学校美術科の教育内容の主題と領域について考察するものである。美術科教育は表現と鑑賞の教育から成り立っている。いずれもそこに主題を見つけて、表現と鑑賞による美術の能力を修得し、同時に人間的資質と能力を育成する教科である。現代において美術の領域は拡大している。伝統美術から現代美術までの時間的経緯による表現領域の拡大と、表現媒体の多様化による拡大がある。さらに日本をはじめとするアジア地域には民族の独自の伝統美術と西洋美術の影響による美術表現の多様化が見られる。そこで本稿では東南アジアのインドネシア、シンガポール、東アジアの台湾と韓国の事例を参考にしながら、グローバル化する現代における独自文化形成のための、わが国の中学校美術科における主題と領域について考察を行う。

1. 研究の背景と目的

わが国の美術科教育の目的は、表現と鑑賞の活動を通じて、造形的な発想や創造性の育成、表現技術の育成、文化の理解・継承・創造にある。さらにそれらを通して人間の基礎的な資質・能力を養うことである。こうした教育の目的は西洋文化の影響を受けたアジア地域においても基本的に類似している。そして人間と美術や社会との関りは、いずれの国や地域においても共通する美術科教育の特質である。

美術と社会の関りでは、特に東南アジアでは独自文化としての国民文化の形成ということに美術科教育が関連している。東南アジア諸国は第二次世界大戦後に国民国家としての独立を果たし、その多くは多民族社会の国家を形成している。そこでは各民族が有している伝統文化、宗教、慣習などが生活の基盤となり、それらを統合して国民国家を形成している。美術文化もそれぞれの国や地域の特性を有しているため、美術科教育において扱う美術の内容も多様である。

また東南アジアや東アジアの国や地域は1945年の第二次世界大戦終了後、国民国家としての独立とともに、経済成長や国際交流による社会のグローバル化が進展した。そのことで文化のグローバル化も進み、もともと欧州の国々が宗主国であった地域はもちろんのこと、独立後も欧米からの文化の影響は様々な分野に浸透してきた。美術表現も同様にグローバル化が進み、情報手段を媒体とした新たな表現が生み出されている。そして現在では、メッセージ性の強い現代美術もアジア諸国に流布し、美術を媒介にして、グローバルとローカルのメッセージを伝えている。そして美術科教育もそうした現代美術に対応している国もある。

本稿はそうした共通するアジアの美術教育の特色において、伝統美術と現代美術の関係、独自の美術と西洋美術の影響、国民国家として独自文化の形成という観点から、東南アジアと東アジアの中学校美術科の事例を参考に、わが国の中学校美術科教育の主題と領域について一考するものである（注1）。

*1 山口大学名誉教授

2. 美術科教育の目的

学校教育における美術科教育の目的は美術文化の継承と創造であり、人間の資質・能力の育成である。わが国では義務教育段階でより良き社会人を育成するために美術教育が実施され、義務教育修了後も自ら学習ができるように、美術に対する興味、関心を抱かせ、生涯学習に通じる教育内容と教育方法を採用している。

美術教育の形態は大きく分けて3種類ある。第一は専門教育としての美術教育である。これは美術を専門とする人たちへの教育で、美術大学や専門学校などでの美術そのものを教育する「美術の教育」である。第二は小中学校、高等学校などでの、いわゆる「美術科教育」である。美術の教科や活動を通じて人間形成を目的とする教育である。「美術による教育」あるいは「美術を通しての教育」といわれる。第三には社会教育、生涯教育などを含む教養教育がある。基本的には美術の教育であり、美術の技法や技術、審美観の修得などを含んだ教育である（福田、2010）。さらに学校教育を担う教員養成の美術教育は第一と第二を融合させたもので、目的は教員としての資質の向上であり、方法としては美術の教育である。

学校教育は個人の人生にとって、その生涯に多くの影響を与える。端的な例を言えば、美術を好きになるか否かも学校での美術科教育に関わっている。学校教育は生涯教育の基礎である理由がそこにある。美術に関しては、学校教育修了後の個人にとって、日常生活や社会において、様々な美術作品や情報に接する機会が多様多様にある。そうした現代の美術の環境を考慮して、学校教育の美術科で、何を教え、育むのか、適切な教材開発はどうすべきかなどを含んだ美術科教育の主題と領域を考える必要がある。そこで次では美術科教育の主題と領域の関係について述べる。

3. 美術科教育の主題と領域

美術教育のなかで学校教育の教科としての美術科教育を考える場合、教育の領域やレベルを考慮する必要がある。また、個々の教材の美術としての位置づけも必要となる。なぜなら、その国や地域の社会人としての必要な基礎的内容を習得することが、義務教育の要件の一つだからである。教育の指針は時代による社会の変化と、求められる人間像を想定して、それに基づく教育の大綱を学習指導要領として定めている。美術科教育もそうした枠組みの中で進められている。

わが国の美術科教育は学習指導要領に基づいて実施され、戦後、昭和22年の試行から始まり、26年、33年、43年、52年、平成元年、10年、20年、30年と約10年ごとに改訂されてきている。そして中学校美術科での学習の領域については昭和22年から43年までは明示されており、絵画、彫塑、デザイン、工芸、鑑賞の5領域に分かれていた。その後、昭和52年の改訂により、表現の領域は一つにまとめられ、全体は表現と鑑賞の2領域となって現在に至っている。つまり昭和52年以前は美術教育の表現領域が優先しており、それ以降は表現の主題によって領域を自由に設定できるように改訂されたと言える。すなわち、美術科教育の内容は主題と領域によって構成されており、主題は表現のテーマやモチーフであり、領域は表現されたものの分類による様式や形式や分野である。

主題からの表現は、「何を表現するか」ということであり、例えば、「平和」というテーマで表現する場合、絵画による心象表現、平和のシンボルの写実表現、彫刻による鳩の像、ポスターによる平和祈願、写真による表現、コンピュータグラフィックスによる動画の作成等の様々な表現形式が想定できる。領域からの表現は、「何で表現するか」であり、主題の設定は表現の主体者が行うことである。例えば、「絵画」という形式において、具象を描くか、抽象的な表現にするか、といった絵画表現の中において表現対象を追究することになる。そして写實的に描くか、印象派スタイルか、キュビズム風に描くか、構成主義的に描くか等々の表現技法を掘り下げることができる。

実際に中学校での学習過程では、主題への着目は、何を表現するかという大きなテーマの下に、テーマを表現するために何に着目するかという段階から始まる。例えば、風景画という大きなテーマがあった場合、奥行き感に着目するのか、自然や人工の配色に着目するのか、構図を強調するのか、明るい雰囲気表現するか、といった表現の主体者がテーマの主題を決定することで、学習を深めることができるのである。

中学校美術科の現行の学習指導要領では、その目標を簡略に述べると以下のように示されている。

- (1) 造形的な視点について理解し、表現方法を創意工夫し、創造的に表す。
- (2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想

し構想を練り、美術や美術文化に対する見方と感じ方を深める。

(3) 美術の創造活動の喜びを味わう、美術を愛好する心情の育成、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造し、豊かな情操を培う。そしてこの目標のために育成する資質能力として、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」としている（文部科学省、2018）。

この資質・能力を美術で育成するために、具体的な対象として、絵画、彫刻、デザイン、工芸を領域として示し、共通事項を知識として取り扱っている。つまり、中学校の美術科教育において考慮することは、美術の特性を生かした人間としての資質・能力の育成であり、しかも生徒の主体的な学びを促すことである。主題と領域の両者を考慮して、生徒の表現と鑑賞の能力を育成することである。

具体的な題材を教科書で見ると、次のようなものがある（注2）。1学年では、[絵や彫刻など]: 絵や彫刻との出会い、見つめると見えてくるもの、じっくり見ると見えてくるもの、なぜか気になる情景、人間っておもしろい、材料に命を吹き込む、墨との出会い、刷って出会う楽しさ、鑑賞との出会い、美のタイムトラベル、絵の中をよく見ると、屏風、美のしかけ、[デザインや工芸など]: デザインや工芸との出会い、広がる模様の世界、文字っておもしろい、印象に残るシンボルマーク、折って・切って・巻いてわくわく、暮らしの中の木の工芸、暮らしに息づく土の造形、自然の美しさから生まれた、祭りを彩る造形。

絵や彫刻の分野では絵と彫刻の両方に表現を促すものがあり、例えば「人間っておもしろい」では人物画と彫刻の両方が例示されている。「材料に命を吹き込む」では彫刻だけでなく工作によるオブジェも含まれている。またデザイン工芸の分野では、「広がる模様の世界」において日本の伝統的な模様の青海波やウィリアム・モリスの植物模様やユニットパターンの繋がりによる模様の作成などを例示している。

このように主題は人間と美術との係わりを基盤として、絵画、彫刻、デザイン、工芸など領域において題材が設定される。さらに個々の題材では日本や西洋の美術、伝統的なものと現代的な美術を含めて例示している。

教育課程の大別として、いわゆる学問中心教育課程と人間中心教育課程がある。学問中心の教育課程は世の中の学問や芸術に即した教育課程であり、学校は社会の縮図として捉えられる。人間中心教育課程では社会参加をしていく人間が、何を学ぶかということをも基盤として教育内容を決めていくのである。教育課程の作成は、片方に偏重することはなく、両者のバランスで進められている。

美術教育の主題と領域の関係性の一つの事例として、シンガポールがあげられる。その美術教育の教育課程を見ると、2000年を境に変化している（福田、2005）。概略的に言えば、2000年までのシンガポールの美術教育の内容は中国系、マレー系、インド系の3つの民族文化を理解するための教育内容となっており、それらは絵画、彫刻、工芸といった領域別に解説されていた。民族文化の理解と継承が教育の目的で、領域からそのことを学ぶことであった。それは現実社会の理解という点で、学問や芸術を中心とする教育課程であった。

2000年以降、「シンガポール国」や「シンガポール人」といった国民統合の確立のために、シンガポール人としてシンガポール国のためにどのような人材育成が必要か、という観点から人間中心教育課程に改訂された。いわば独自文化形成に方針が変わってきたと言える。美術教育では、表現の主題として「民族」「環境」「伝統」「対象」などを掲げ、主題に基づいた美術表現を多様な領域で行うという教育内容に変化していった。そしてそこには創造性育成が重視されてきた（佐々木、2017）。

国民教育の教育内容は国や地域、社会情勢によって異なるが、主題と領域をどのように扱うかによって独自性が生まれてくる。既成の価値観を伝達継承することと新たな美術表現や考え方を創造することも美術科教育の役割の一つである。

次章では、国民教育として美術科教育の領域をどのように想定するのかということをも、東南アジアと東アジアの事例で述べる。

4. 独自文化の形成と美術科教育

前章までに美術科教育の主題と領域の関係について述べてきた。世界がグローバル化している今日、アイデンティティーや独自文化をどのように想定すればよいのか、ということも考察するために、ここでは東南アジアと東アジアの事例を紹介し、美術科教育の役割の一つである文化の継承と創造と独自文化、国民文化の形成について述べる。

(1) 東南アジアの事例

東南アジアはそのほとんどの国が多民族社会であり、同時に多文化を共有する社会である。世界がグローバル化すればするほど、アイデンティティーや独自文化の追求と確立が望まれ、今日に至っている。そしてグローバル化の意味が「西洋化」と同意義と捉えられることも多く、アジアの文化と西洋文化との関係も美術科教育に影響を及ぼしている。ここでは多民族国家で歴史の長いインドネシアと近代の都市国家のシンガポールを事例に考察する

① インドネシアの美術科教育

国民文化の形成という観点から、250以上の民族からなる多民族国家のインドネシアの中学校での教育課程を見ると、次のようなことが言える（注3）。美術科教育は「芸術文化」という科目で実施されており、これは美術、音楽、舞踊、演劇を含んでいる。第7学年（中学校1年）の美術では、要点として、「信仰している宗教の教義を尊重する」「地域社会での交流によって、誠実、責任感、関心、恩恵などを認識する」「視覚的な現象や科学的知識、技術、文化に対する知識欲求に基づいて、美術の要素や理念を理解する」「動植物、自然物を描く」などがあげられている（Kemetrician Pendidikan dan Kebedayaan, 2013）。また、教科書の題材では、中学校1学年では「植物、動物、自然物を描く」、「装飾模様を描く：テキスタイル、木材工芸」、中学校2学年では「モデルを描く」「イラスト」「ポスター」「漫画」、中学校3学年では「絵画、彫刻、グラフィック、展覧会」が例示されている（Eko Purnomo 他、2018）。これは西洋美術の影響による絵画、彫刻の純粋美術と工芸、デザインなどの応用美術の枠組みを応用している。つまり領域を主とした教材構成となっている。

インドネシア独自の絵画表現はワヤンであり、デザインではバティックの模様であり、イスラムのカリグラフィなどあげることができる（注4）。

現代のインドネシアの美術科教育ではその領域を枠組みとして西洋のものを活用し、表現分野においてはインドネシア独自の教材を盛り込んでいると言える。そしてそれらを総合すると後述の「四層構造」として位置づけることができる（福田、2022）。

② シンガポールの美術科教育

ここでは東南アジアの特徴ある美術科教育の実施国であるシンガポールの事例を述べる。シンガポールは、中国系、マレー系、インド系の3つの民族からなる近代都市国家である。1965年にマレーシアから再独立し独自の都市国家として発展してきた。民族構成からみると中国系が75%であり、マレーシアとは民族構成の割合が異なっている。そのために中国文化の影響は大きく、2000年までに三民族の文化理解を進め、さらには多民族社会を統合する新たなシンガポールとしての文化の創造を目指している。

美術科教育の内容で見ると、2000年までの異文化理解を目的とする美術の領域を主とした教育から、2000年以降の主題を重視した教材構成へと変容してきている（福田、2005）。表現の領域から美術科教育を始めるのではなく、身近な問題や社会や世界を認識するための主題から美術表現を構想する方法へと転換してきている。シンガポール教育部では、その具体的な主題として、「対象」「民族」「伝統」「環境」「経験」などを例示している。また、美術表現の方法のために視覚言語による造形方法を基礎としている。主題から取り組み、視覚言語を活用し、創造的な活動を促すのである。表現手段も従来のものに加えて、映像やインスタレーションといった現代的媒体も導入し、領域を拡大し自由に表現をすることを奨励している。

シンガポールは三つの民族を理解、尊重しながら「シンガポール国」としての統合を目指している。そこには各民族の伝統文化を基盤として、新しい文化としての「シンガポール文化」を創造しようとしているのである。美術科教育もそうした方向性で、現代美術の手法を活かして教育が行われている。それは新たな表現領域の創造を目指しているともいえる。

(2) 東アジアの事例

次に、東アジアの事例として、台湾と韓国を取り上げる。台湾と韓国はかつて一時期、日本の植民地であったことから、文化の歴史的交流の中に日本の存在が認められる。また、そのことにより、植民地時代には日本を介した西洋文化が影響を及ぼした。こうした背景を考慮して、台湾と韓国の美術科教育の主題と領域の特徴を述べる。

① 台湾における美術科教育

台湾の美術科教育は2000年以降、「芸術と人文」という学習領域において行われている。従来の教科を拡大し「学習領域」として幅の広い教育内容を設定したのである。「芸術と人文」の学習領域には、音楽、視覚美術、表演（パフォーマンス・アート）の分野が含まれている。主題と領域の関係から言うと、主

題を優先し、それに関連する領域の探究を行っている。例えば「故郷」という主題を採り上げると、故郷について人文的内容の学習を行い、その後、音楽、美術の表現の学習を行うことで、主題のもつ多様な内容を理解することができる（注5）。

そして美術の分野で表現をする場合、主題に関する領域は幅広く、伝統美術から現代美術までを包括することができる。台湾の美術は中国の伝統美術と日本美術の影響、日本を介した西洋美術の影響、さらに戦後の直接的な中国、欧米の影響によって変容してきている。それらを構造化すると、後述のアジアにおける近代の美術の四層構造となる（福田、2020）。台湾における伝統美術は中国の歴史的な美術と日本による統治時代にもたらされた美術が想定される。そして同時に模索された台湾のローカル・カラーの創出によって、台湾の独自性を生み出したのである（福田・王、2017）。

美術科教育において主題を優先して教育を行う場合に、自国や地域の歴史的現代的美術表現を把握して表現の追究を行うことで創造性の育成が可能となる。

② 韓国における美術科教育

韓国は北朝鮮とともに1910年から1945年まで日本の統治下にあった。それ以前は中国との関係が強固であった。そして1945年以降は、朝鮮戦争を経て独立国家として「大韓民国」と「朝鮮民主主義人民共和国」が成立した。こうした経緯を有しながら韓国の美術科教育は1946年から整備され、変遷を遂げている。ここでは大韓民国を事例とする。

美術科教育の教育課程は日本との類似点を有している。解放直後の教育課程の体系化、児童生徒中心の教育運動、教科中心教育課程、学問中心教育課程、DBAE (Discipline Based Art Education, 学問に依拠した美術教育) の影響、伝統文化の重視、グローバル化などの変遷を経ている。そして現在は小中学校の9年間に高等学校の1学年を加えた10年間を「国民共通教育期間」と定め、健全な人格の形成、創造性の涵養、国際化と情報化への対応なども美術科教育の目標に加わっている（福田・金、2020）。

具体的な教材としては、伝統美術の絵画、書、工芸と近代美術の絵画、工芸、工作、デザイン、映像等が対象となり、造形方法も多様化している。その背後には独立後のグローバル化と独自性の追究を試行してきた美術運動の存在がある。現代美術の国際化と独自性の追究は美術科教育にも影響を及ぼしている。そして現代の美術科教育は国際化への対応と同時に、アイデンティティーの確立を促進する役割を有している。

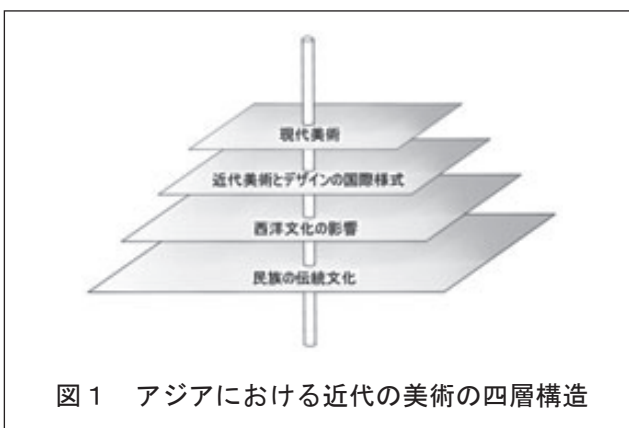
領域を拡大することで主題の設定も多様化している。古い韓画をヒントにして現代社会を水墨で描くような教材も開発されている。そこでは韓国の歴史を通して当時の生活を感じ、現代の生活を、同じ媒体の水墨で表現することで自分たちの世界を深く理解するものとなる。

(3) アジアにおける近代の美術の四層構造における領域

前述までにインドネシア、シンガポール、台湾、韓国の美術科教育について概略を述べた。そして現代の美術科教育は国際化の進展とともに、アイデンティティーの確立による独自文化の追求も行われていることが明らかになった。アジアの多くの国と地域は第二次世界大戦後に国民国家としての独立を果たしてきた。そして、多くが多民族多文化社会における国家としてのアイデンティティーの確立を進めている。

美術においては民族が培ってきた伝統美術と西洋美術の関係性がもたらされ、やがて独自文化の形成が美術科教育においても進められてきた。特に高等教育の美術教育では西洋文化と伝統文化の融合や対峙、統合による新たな国際化した独自文化の形成を試行してきた。美術科教育が国として健全な社会人育成を目的として、美術の教育を実施していくうえで、国際化した社会と独自文化の形成に資する人材育成を行うのは自然の様態と言える。こうしたアジアの民族の伝統文化、西洋文化の影響、国際化した現代美術、国民国家としての独自文化の形成について時間軸を積層すると図1のように構想される（注6）。

この図では、一番下の層が各民族の伝統文化であり、その上に西洋文化の影響がある。さらに第三層に近代美術と国際化するデザインの影響による文化形成がある。そして一番上に国際化と独自性を追究する現代美術が存在する。そしてこの四層を総合的



一体的に捉えたものが国民文化といえる。

5. 日本における美術の四層構造

前章までに東南アジアのインドネシアとシンガポール、東アジアの台湾と韓国を採り上げてアジアにおける近代の美術の構造と美術科教育の領域について述べた。ここまでに述べた美術の四層構造と美術科教育を踏まえて、ここでは日本の美術科教育の主題と領域について述べる。

日本の近代化は19世紀後半から始まる。美術文化の分野からすると、明治時代は西洋文化の流入と日本のアイデンティティーの確立であったといえる。したがって明治以前の日本の美術文化が日本の近代美術の基盤となる。そこで近代の美術を四層に構造化すると前述の図1であり、時代区分と内容は以下である（福田・金、2021）。

- (1) 第一層：明治時代以前の日本の伝統美術、民族の伝統文化
- (2) 第二層：近代美術の始まり、西洋文化の影響
- (3) 第三層：近代化とグローバル化
- (4) 第四層：グローバル化と独自文化の再構築

日本の近代美術の構造についてはグローバル化との関係が影響している。それは日本の江戸時代の1636年から1854年までの鎖国によって、日本の文化は浄化、純化され、日本独自の美術文化を築いたからである。そこで、第一層として江戸時代の鎖国期間に築かれた日本美術が近代美術の基礎といえる。古くは中国、朝鮮の文化を受け入れて日本化してきた経緯がある。江戸時代の鎖国により、美術も工芸も日本独自の表現を極めた。浮世絵、琳派などをはじめ、種々の工芸も日本独自の表現が各地に展開された。これらを総じて日本民族の伝統美術といえる。

第二層は1854年の開国以降の西洋文化の移入により、美術への変化が始まる。具体例としては、油絵の具による西洋絵画の現がある。直接、ヨーロッパに留学したり、国内で西洋画の技法で描いたりした画家もいたが、いずれにしても西洋絵画をお手本として表現技術の習得を行った時期である。油絵の具による技法を日本化し、西洋画と日本画を融合させた日本独自の油絵の具による絵画表現も出現した。これらが第二層から第三層への移行期と想定できる。

その後、明治時代の末から大正時代にかけて、フォーヴィズム、キュビズム、表現主義、構成主義、抽象主義などの西洋からの近代美術の画派が影響を及ぼし、日本国内でも追究された。そこには絵画が写実から離れることによって、何を描くかということだけでなく、主題をどのように表現するかという問題に取り組んだ。これらが第三層であり、西洋美術を採り入れて消化し、日本的な表現を形成した時期である。

美術科教育の分野では、明治時代の臨画教育から児童生徒の主体性や内面を重視した自由画教育運動が大正時代に展開された。その後バウハウスの影響により、わが国でも構成主義や構成教育の運動が大正時代に流布した。そしてデザインの分野での教育も進展して、戦時期を迎えた。この時期も第三層と捉えることができる。それは戦後もしばらくは模索され、1960年代以降の現代美術へと繋がっていくのである。戦後の経済成長によりデザインの普及と進展がなされ、同時に交通や通信技術の発達によりグローバル化が進んできたのである。

第四層として想定できるのは1960年代以降の美術活動である。現代美術だけでなく日本画による新たな主題への追究も絵画の中では現代化をもたらしている。また、グローバル化と情報技術の発展はコンピューターによる新たな視覚的世界を提示している。表現手段の多様化とメッセージの拡大が現代美術の一つの特徴となっている。メッセージはグローバルとローカルの視点を含んでいる。世界に伝えたい内容と地域からの発信の両者を含むものである。

このように四層構造は、伝統文化を基盤として、今日に至るまでの経緯の中で、多様な美術表現を獲得してきた財産が存在している。これらの四つの層は時間的には積み重なるが、時間の経過で消滅するものではなく、包括されていくのである。そして美術表現の領域は拡大し、主題はグローバル化してきている。さらに、グローバル化と伝統文化、アイデンティティーの探究が併存している。グローバル化は世界を理解し協力するための重要な方法であり、アイデンティティーの追究は相互の尊重のための要因である。

6. まとめ

前述までに東南アジア、東アジアの美術と美術科教育について述べ、伝統文化、西洋文化、グローバル化によって、美術科教育の表現と鑑賞の領域が拡大したことを明らかにした。そして美術科教育の方法として主題と領域について述べた。

世界がグローバル化している今日、美術科教育の内容は主題と領域のバランスが重要となってきている。生徒の身近な生活から世界の認識までの広範囲にわたる美術の対象を、美術科教育としてどのように取り扱うかということである。既成の価値観の定まった美術の領域を対象として、それらを理解し、表現と鑑賞の活動に直接的に活用する領域重視の教育と、生徒の身近な環境や社会や世界といった認識から主題を決定し、主題の深化、生成を図りながら表現の教育と創造性の育成を重視するという方法が想定できる。いずれにしてもグローバル化している世界において、自己存在を認識する固有の独自文化に触れ、継承し創造することが国民教育として必要となっている。

おわりに

以上のことから、わが国における美術科教育の教育内容と方法について、主題と領域の関係の提案として、以下のように考えることができる。

- (1) 美術の四層構造の全体把握：伝統美術から現代美術までの美術科教育の背景となっている国民文化を、全体的に把握して美術文化の理解と表現を進める。全体把握は発達段階を考慮して、通史で教え込むだけでなく、歴史などの他教科との連携も図る。
- (2) 伝統文化と現代文化の把握：主題を生み出すことを重視する場合においても、伝統的な作品や歴史的な遺産も含めながら、主題を深く学ぶ。人種、伝統、宗教、環境、歴史、社会などの広い範囲を対象として、主題の生成を行う。
- (3) 時間軸と空間軸からの創造：美術の四層構造の縦軸である時間軸と現代美術のような表現の拡大された空間軸を考慮して、美術表現の創造性育成を行う。例えば古いものからの発想、異なった分野からの発想などで創造性の育成を促す。
- (4) 美術作品の領域の拡張：現代美術の一例のように、お菓子や料理を美術の領域に含める教材開発もなされている。和菓子が教材として取り扱われているが、それは日本美という美意識の教材でもある。身近な対象によって日本の独自文化を認識することができ、日本と西洋との比較を学ぶこともできる。

このように美術科教育の表現と対象が拡大している今日、四層構造の総体的把握によって、主題と領域を考えた教材開発が可能となる。そしてそのことで美術科教育がグローバル化と独自文化の形成に収斂することを認識することができる。

注

- 1 本稿は以下の文部科学省研究費補助金による研究の一環である。石井由理代表「アジアの芸術教育におけるグローバル化と国民文化形成」（2017 - 2022、研究種目：基盤研究（C）、課題番号：17K04793）及び、佐々木幸代表「アジアにおける美術教育による創造性開発とその実質化に関する研究」（2020 - 2023、研究種目：基盤研究（C）、課題番号：20K02784）、福田隆眞代表「アジアのグローバル化と芸術教育による独自文化形成の調査研究」（2022 - 2025、基盤研究（C）、課題番号 22K02635）。
- 2 2022年現在、中学校美術科の教科書は3つの出版社から発行されている。本稿ではその一つの日本文教出版社のものを事例として使用する。なお領域の彫塑は平成元年より彫刻に改められた。
- 3 インドネシアの教育課程では表現領域と資質能力の育成をあげている。以下の文献を参考にした。Kemetrian Pendidikan dan Kebudayaan. (2013). Kurikulum 2013 Kompetensi Dasar Sekolah Menengah/Mardasah Tsanawiya, 2.
- 4 ワヤンはインドネシア、マレーシアの伝統的な影絵であり、影となる人形などに彩色を施したものである。2019年8月、インドネシア、ジョクジャカルタ州立大学美術教育アンバルワティ教授へのインタビューによる。

- 5 2015年12月の筆者の台北教育大学附属小学校教諭チャン・ユフ氏へのインタビューによる。
- 6 このアジアの近代における美術の四層構造は、2016年に福田が、それまでの東南アジアと東アジアの美術教育の実態調査を含めて構想した独自の構造図である。

引用・参考文献

- Purnomo, E., Haerudin, D., Rohmanto, B., Juih, J., & Kementrian Pedidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia. (2018) : Seni Budaya SMP/MTs Kelas VII..Pusat Kurikulum dan Perbukuan.
- Purnomo, E., Haerudin, D., Rohmanto, B., Juih, J., & Kementrian Pedidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia. (2018) : Seni Budaya SMP/MTs Kelas VIII. Pusat Kurikulum dan Perbukuan.
- 福田隆眞 (2005) : 「創造性に向かうシンガポールの中等美術科教育」『日本教科教育学会誌』, 28 (1), 51-58.
- 福田隆眞 (2010) : 「美術の教育と美術を通しての教育」『美術科教育の基礎知識』建帛社, 4.
- 福田隆眞・王宇鵬 (2017) : 「台湾の近代美術におけるローカル・カラーについて」『山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要』, 43, 107-115.
- 福田隆眞・金香美 (2020) : 「韓国の近代美術と美術教育実践のための構造について」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 49, 29-39.
- 福田隆眞・金香美 (2021) : 「美術教育の領域としての近代美術の四層構造について—日本と韓国を事例として—」『造形教育』, 76, 韓国造形教育学会, 193-207. (学会誌にはハングルで掲載)
- 福田隆眞 (2022) : 「アジアにおける近代美術の構造と美術教育」『美術教育学研究』, 54, 大学美術教育学会, 281-288.
- Kemetrician Pendidikan dan Kebudayaan.(2013) : Kurikulum 2013 Kompetensi Dasar Sekolah Menengah/Mardasah Tsanawiya, 2.
- 林曼麗他 (2016) : 『台湾の近代美術—留学生たちの青春群像(1985-1945) 展覧会図録』, 東京藝術大学大学美術館.
- 文部科学省 (2018) : 『中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 美術編』, 日本文教出版社.
- 村上尚徳他 (2021) : 『美術1』, 日本文教出版.
- Milasari., Subagi, H., Masripah, S., Jermanto. & Kementrian Pedidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia. (2018) : Seni Budaya SMP/MTs Kelas IX. Pusat Kurikulum dan Perbukuan.
- 佐々木幸 (2017) : 「シンガポールの美術教育における国民統合」『美術教育学研究』, 49, 大学美術教育学会, 177-184.